

“旧町名”で語る 明治名古屋商人の活躍

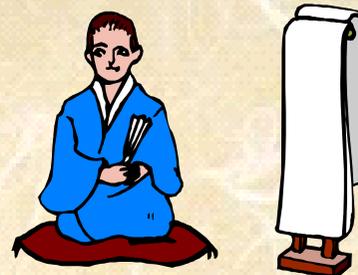


明治42年の地図を元に作成

北見昌朗

平成24年9月作成 V I

碁盤割の構成



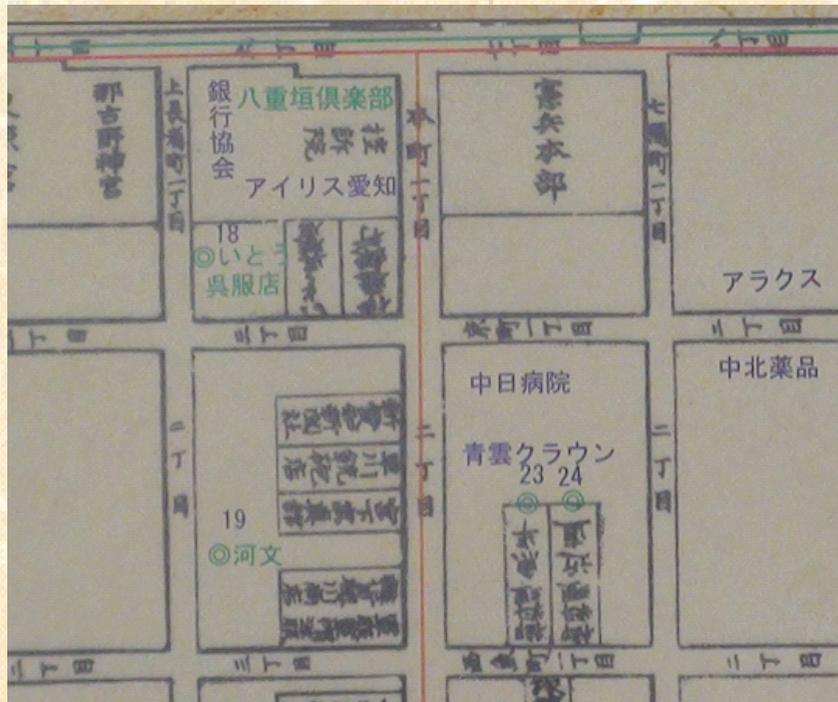
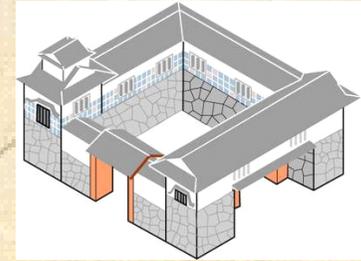
東西の通りを「筋」、南北の通りを「通り」という。

伝馬町を境にして「カミ」「シモ」という。

古いまちを「まち」、比較的新しいまちを「ちょう」と読む。以下の町名は「まち」と呼ぶ。
鷹匠町、塩町、納屋町、皆戸町、上園町、桑名町、島田町、長者町、伊勢町、大津町、朝日町、新柳町、袋町、五条町、茶屋町、京町、魚町、宮町

読み方の面白い町。魚之棚(うおんたな)、桜町(さくらんちょう)、車町(くるまんちょう)、長堀町(ながへいちょう)

お城の玄関 本町



本町は、明治時代の地図を見ると、5丁目までであった。

県産業貿易会館は、江戸時代に評定所、明治時代に憲兵隊本部だった。

同西館は、江戸時代に町奉行所、明治時代に控訴院だった。

滝兵右衛門商店が本町進出へ



滝兵右衛門商店(現タキヒヨー)は、4代目兵右衛門(左の写真)が明治8年に本町に土地を購入して名古屋進出した。(この土地は昭和55年に経営不振に陥った際に東京海上に売却した)



4代目は明治15年に名古屋銀行を設立して初代頭取に就任。同銀行が取り付け騒ぎに遭った際には私財を投じて責任を果たした。大正元年に(株)滝兵商店を設立して、初代社長に5代目の信四郎が就任。

南鍛冶屋町2に5千坪の豪邸があり、池あり滝ありで、鶴まで飼われていた。

今度は2度目の名古屋進出 大丸屋



大丸屋(下むら)は、現在の大丸百貨店のことである。名古屋の店は、本町5丁目(現中区錦2丁目4番地 ハザマビルの近辺)にあった。ここは江戸時代に高札が置かれ、札の辻とも呼ばれていた。大丸屋は、享保13年(1728年)にこの地で店を開いた。

大丸屋は、明治41年に会社組織になって、本店が東京に移り、東京・大阪・京都松原店は陳列式に改装されるなど近代化された。だが名古屋の店は旧態然としていて、広い店内に反物を抱えて、番頭や丁稚が顔を並べるという有様だった。客足は遠のく一方だった。明治43年になって、遂に名古屋の店は閉鎖された。

長谷川時計があった玉屋町



本町の南側は「玉屋町」(たまやちょう)と呼ばれていた。4丁目までであった。

江戸時代には、玉屋町は桔梗屋呉服店や、本居宣長の「古事記伝」出版で有名な永楽屋東四郎こと永東書店もあり、大きな商人が軒を連ねていた。

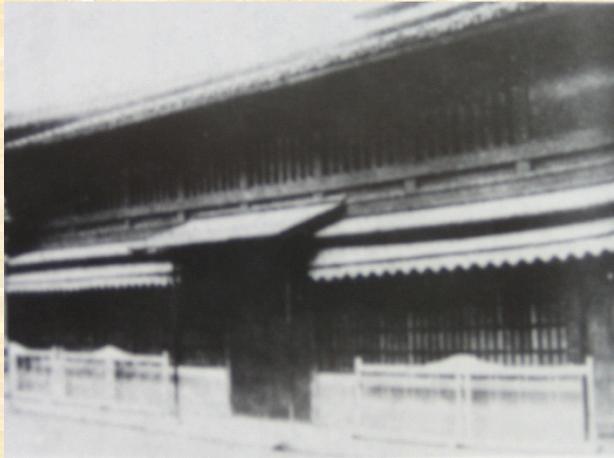
居酒屋が軒を並べ、遊女を置く店もあった。

明治10年は、名古屋に長谷川時計塔ができた。

十一屋は、江戸時代から玉屋町で呉服店を開いてきたが、大正4年に栄町に進出し、いとう呉服店の近くで百貨店を開業した。大正10年には、店舗を鉄筋5階建てに改築し、本格的な百貨店になった。現在の丸栄につながる。



旧愛知銀行(旧東海銀行の前身)



愛知銀行は、本店が現在の万兵の場所にあった。明治29年設立。資本金は2千万円。

主な株主は、徳川義礼、岡谷惣助、山内正義、関戸守彦、伊藤由太郎、吹原九郎三郎、中村与右衛門、祖父江重兵衛、伊藤次郎左衛門、岡田良右衛門。

役員は、頭取に岡谷惣助が就任。取締役に関戸守彦、酒井明、吹原九郎三郎、中村与右衛門、岡田良右衛門、伊藤由太郎が就任。

愛知銀行は、旧尾張藩主徳川家と、その御用達商人によって構成されただけに、極めて保守的・安全第一の社風だった。

名護屋駅まで拡幅された広小路



広小路は、明治時代の地図では、西側が「新柳町」(しんやなぎまち)、東側が「栄町」(さかえまち)になっている。

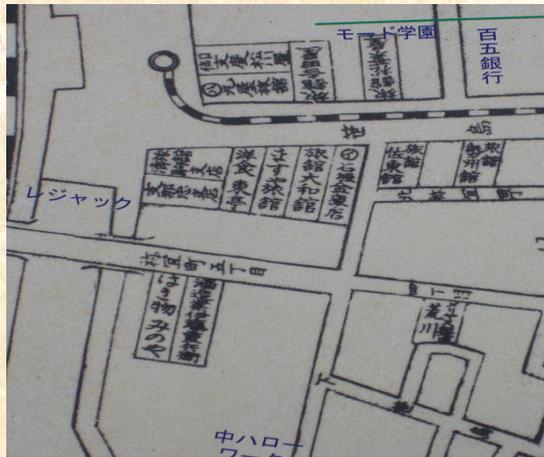
明治19年に笹島に名護屋駅が開業した。20年に広小路は名護屋駅まで拡幅された。

(上図)広小路本町の交差点の西側には、日露戦争凱旋門が建てられた。広小路をまたいで建てられた。徳川義礼の書で「凱旋門」と書かれていた。名古屋城の第3師団は明治39年に凱旋。



(下図)栄から東を見る。左側が日銀名古屋支店、右側がいとう呉服店。先に日清戦争戦没者記念碑が見える。

名護屋駅(笹島ステーション)が開業



「汽車が走るようになったゾー 陸(おか)蒸気ダ
というナー ーペン見にいこまアーか」

この明治19年は「名護屋駅(笹島ステーション)」が、
開業した記念すべき年であった。

その停車場はなまって「笹島ステーション」とか「笹
島ステーション」とも呼ばれた。名護屋駅は、現在の笹
島交差点付近にあった。停車場ができる前は、水田
と葦の茂る沼地だったという。

この停車場が出来てからというもの、わざわざ見学
に行く者が多く「汽車見亭」という茶店まで出来たほ
どだった。その茶店は、現名古屋駅の東北にあった
旧松岡旅館の近辺にあったという。その茶店で見れ
ば、機関車がゴトン、ゴトンと音を立てて走る姿を、
ゆっくり見物することができた。

笹島駅前には旅館志那忠があり、乃木大將が泊ま
り「信忠閣」と筆を取った。名古屋駅は、昭和12年に
現在の場所に移転。

共進会に合わせてビアホール開店



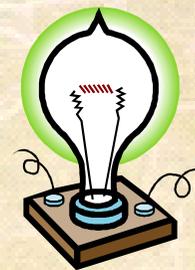
共進会の開催は、名古屋の活性化につながり、街中が賑わった。そんな中で、当時としてはハイカラだったビアホールを作った人もいた。その名は、盛田善平という。

盛田善平は敷島パンの創業者だ。明治22年に半田でビール工場を造り、カブトビールという名で売り出した。

関西府県連合共進会が開かれた際に、洋館2階建てのビアホールを作ってビール党を堪能させた。場所は、新柳町1丁目である。

盛田善平が後年にパンの製造業に乗り出すのは、ドイツ人捕虜のおかげだった。第1次世界大戦で東区出来町にドイツ人俘虜収容所ができ、その食事をみてパン製造を思い立ち、大正8年に敷島製パンを創立した。

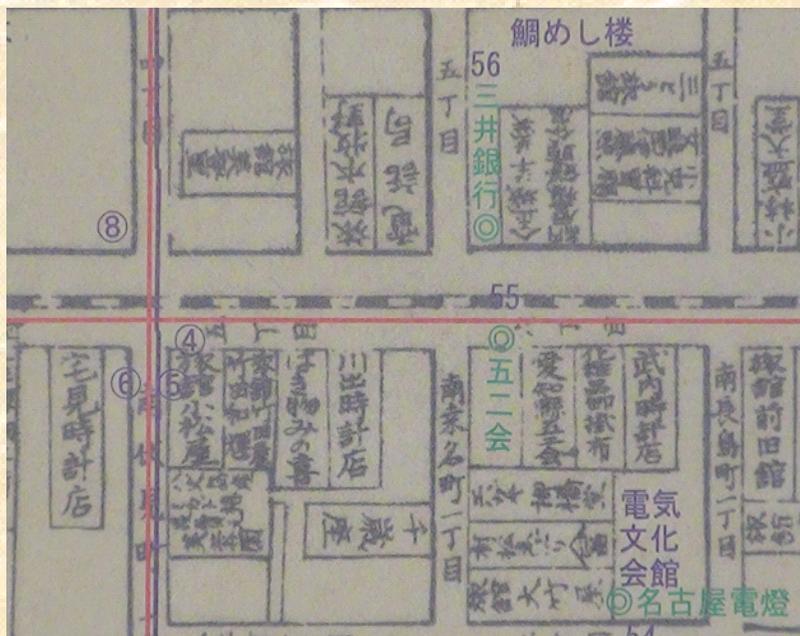
電気文化会館は「名古屋電燈」跡



名古屋電燈は、現在の電気文化会館にあった。

「日本の電力王」と呼ばれる福澤桃介は、慶応義塾の先輩である矢田績に招かれ、名古屋電燈の株を明治42年に買い占めて名古屋に乗り込んだ。

名古屋電燈は士族が中心になって設立した公共事業で、桃介はこの経営陣と対立したので、辞任して名古屋を後にした。



福澤桃介と川上貞奴

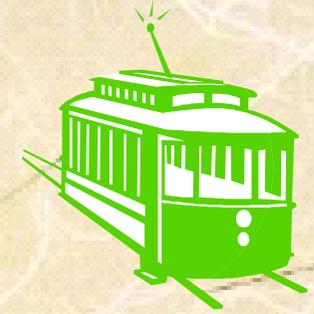


桃介はその後復歸して社長に就任してダム建設に邁進。安価な電力を供給できるようになり中部地区のインフラ整備に貢献した。



後年は川上貞奴と同居し、夫婦同然の生活であった。「二葉御殿」は、桃介と貞奴が共に暮らした家。2千坪を超える敷地に建てられ、和洋折衷の建物は名古屋財界に入れない外様派が集結して「二葉御殿」と呼ばれてサロンになった。

名古屋で路面電車が走る



明治31年は、名古屋を路面電車が走った。名古屋電気鉄道(愛知馬車鉄道から社名変更)が、笹島から愛知県庁前まで、電車を走らせた。

「愛知県庁」といっても現在地ではない。当時の愛知県庁は、栄町6丁目(現中区新栄町2丁目1番地)にあり、現在は栄第一生命ビル・ノリタケビル・NTT栄ビル西館等が建っている。ちなみに、現中区役所は「名古屋市役所」だった。

つまり、この路面電車は、笹島から広小路を通り、新栄まで走っていた。

いとう呉服店が栄町で百貨店を開業



共進会の開催と合わせるように、明治43年、栄町に名古屋で初の百貨店がオープンした。場所は栄町5丁目(現中区栄3丁目4番地丸栄スカイルの所)だ。

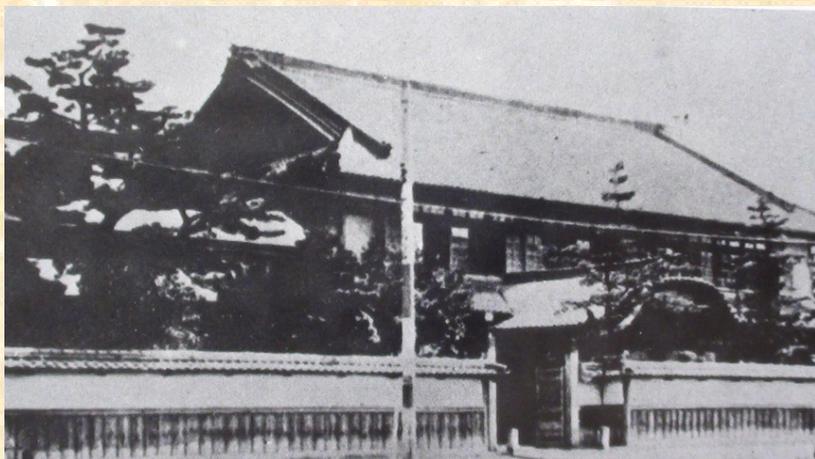
店は木造だったが、ルネサンス洋式を基調とする3階建てだった。延べ床面積は1千200坪あり、市民はその豪華さに目を見張った。

この百貨店を創ったのは、15代目伊藤次郎左衛門祐民(すけたみ)だった。

いとう呉服店は、大正14年に現在地の天津通に移転した。店名も「松坂屋」に統一した。



栄町に名古屋商工会議所



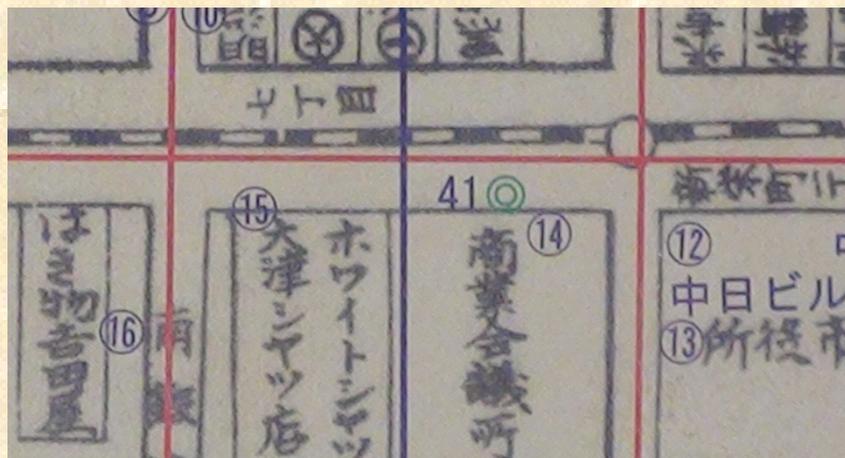
名古屋商法会議所は、明治14年に設立されたが、当初、桑名町の加藤庄兵衛といふ味噌屋の座敷を借りていた。

そこで栄町7丁目(現市バスターミナルの場所)に会館を造ることになった。明治29年に完成した。

新所屋は、本館が木造2階建てで135坪、議事堂が西洋造の平屋建てで139坪、付属建物35坪だった。

名古屋商業会議所の大広間を舞台に産声をあげた企業もたくさんある。明治29年には、愛知銀行創立総会、日本車輛製造創立総会などが行われた。

この会館の建物は、現在、建中寺に移築されていて、徳興殿という名称になっている。国の登録有形文化財。



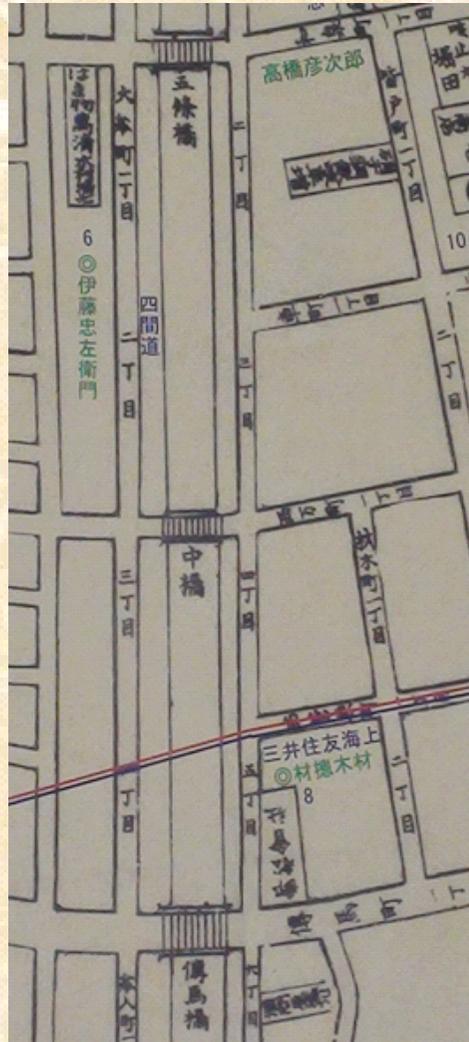
新栄町には日清戦争の戦役記念碑



日清戦争の戦役記念碑は、高さ22メートル(7階建てのビルに匹敵)、砲弾スタイルだった。

北側に愛知県議事堂があったが、この記念碑を回る度に路面電車の音がうるさかったので、大正9年に覚王山に移された。

大船町と船入町と納屋町 木挽町と天王崎町



(堀川の西側)伝馬町を境にして、北側が大船町(おおふなちょう)、南側が船入町(ふないりちょう)。広小路から南側は「納屋町」(なやまち)だった。

堀川の西側は、主に食料品を扱う商人が多くいて、米・塩・油・砂糖・鮮魚などを売っていた。

(堀川の東側)木挽町(こびきちょう)は、堀川の東側の南北の通り。広小路の南側は「天王崎町」(てんのうざきちょう)だった。

名古屋城築城の時、ここに木挽小屋が造られ木挽職の者が居住していたので、町名とした。木挽とは、木材を大鋸で挽く人、木こりのことをいう。清須越の町ではない。

堀川の東側は、清洲から移住してきた材木屋が集まった。尾張藩は、尾張名古屋は木曾で持つと言われたぐらい、木曾の木材が大きな財源になっていた。だから材木商は、尾張藩御用達の特権商人だった。周囲には、竹材、障子などの建築資材を扱う商人も多かった。

財界のリーダー 鈴木惣兵衛(材惣木材)



材惣木材の創業の地は木挽町。針屋町の酒造業・日比野茂兵衛の長男だった茂三郎を、養女のぶ(名エン青木新四郎の次女)の婿養子に迎え、彼が明治8年に8代目鈴木惣兵衛になった。7代目は上前津の別荘龍門園に隠居。8代目は明治31年に愛知時計電機を設立すると同時に社長就任。関与した会社は、日本車輛製造、愛知木材、名古屋倉庫、名古屋瓦斯など数え切れない。名古屋市会議長も務めた。

奥田正香の後を受けて大正2年に名古屋商業会議所の会頭に就任。

なお、八代目鈴木惣兵衛は、現社長龍一郎の曾祖父にあたる。

長者町と八百屋町

長者町(ちょうじゃまち)は、伝馬町を境にして、カミとシモに分かれていた。広小路の南は「八百屋町」(やおやちょう)だった。

長者町を有名にしたのは、上長者町かいわいを根城とする盛栄連の姐さんたちだ。絃歌と嬌声のさんざめく巷へとスタートしたのは文化文政年間(1804~1830)で天保の頃が第一期黄金時代、明治6年、盛栄連が結成されると、その名声はいよいよ高く、天下の名士は千客万来、長者町通だけでも人力車詰所が5カ所もできた。芸者置屋は34軒80人(大正3年調べ)、盛栄連のよき時代であった。

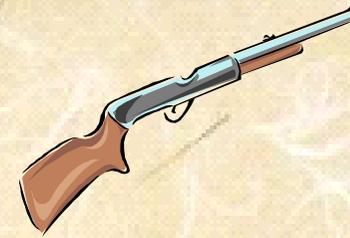


左は上長者町3丁目から城の方向を写した写真。なお、上長者町3丁目は、河文の南西近辺である。

なお、長者町が繊維街になったのは戦後である。

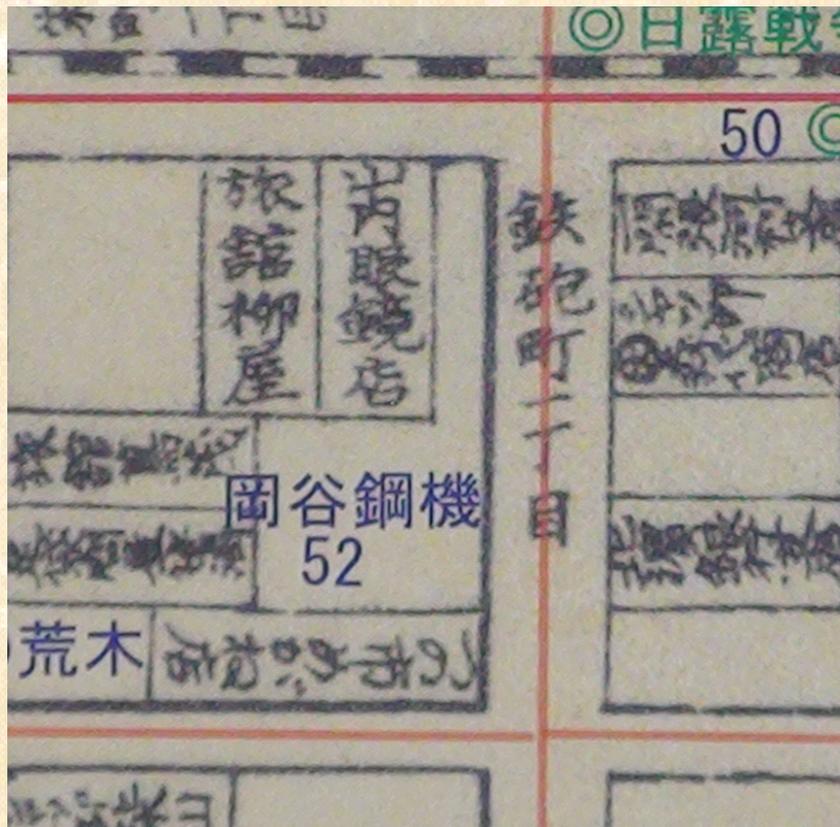


鉄砲町

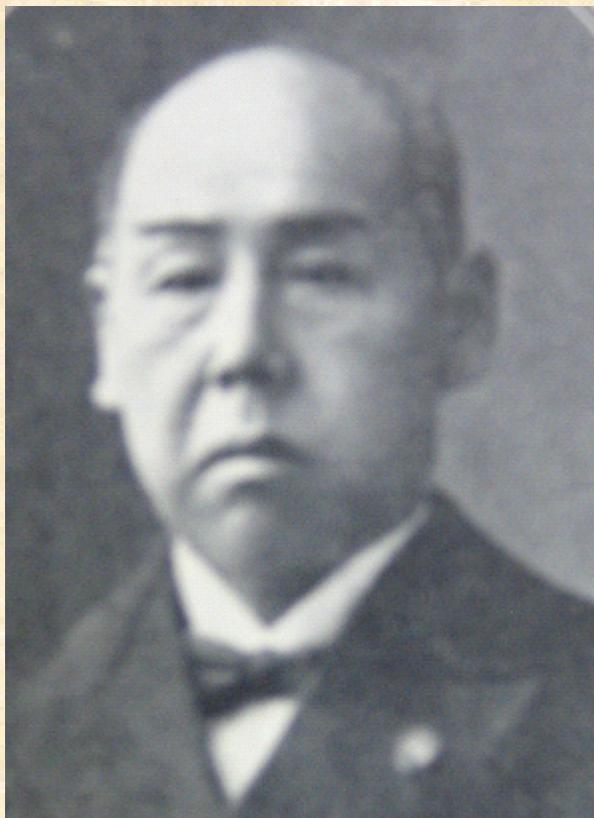


広小路を境にして、
玉屋町の南側は「鉄砲
町」(てっぽうちょう)と
呼ばれた。

なお、慶長年間の清
須越の町で、清須の町
で鉄砲を製造する職人
が住んでいたのので、鉄
砲町と名づけられた。



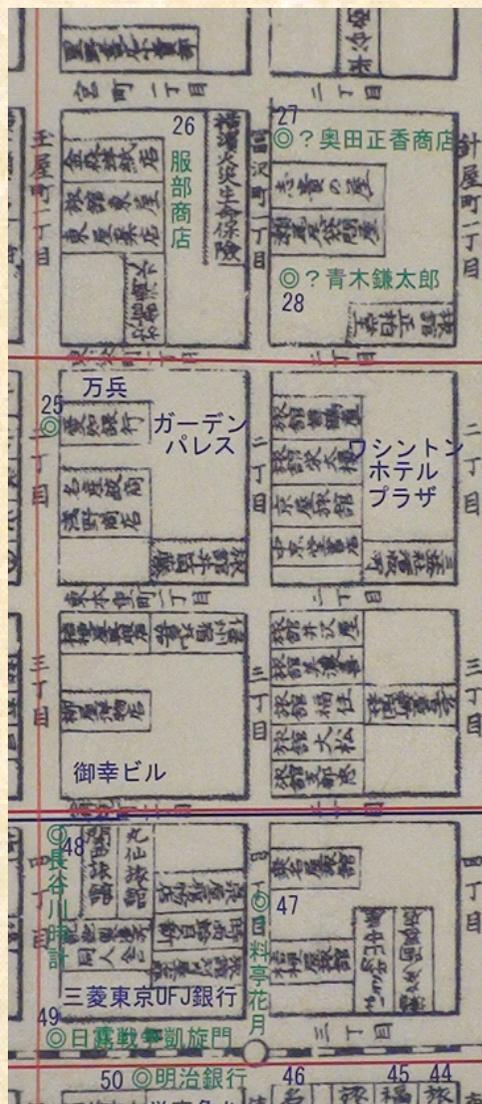
明治の動乱期に発展した岡谷鋼機



岡谷鋼機の岡谷家は、9代目惣助が幕末から明治にかけて活躍。慶応3年に家督相続し、金属類の需要増大を予測し、古銅材などを在庫し、安定供給する体制を作り上げたことが維新時に利益を生む礎になった。明治4年に愛知七宝会社を設立し、ウイーン万国博に出品するなど世界に七宝焼を輸出し、貿易の先駆者になった。

伊藤祐民は、この9代目惣助の娘ていと結婚。伊藤家と岡谷家は何代にもわたって婚姻関係がある。

七間町と富澤町と住吉町



伝馬町を境にして、北が七間町（ひちけんちょう）、南が富澤町（とみざわちょう）だった。

広小路の南は「住吉町」（すみよしちょう）だった。

豊田佐吉と服部兼三郎は、盟友だった。仕事があまくいった時は、2日でも3日でも徹底的に飲んだ。飲んでいた場所は料亭花月（かげつ）だった。花月は富沢町4丁目にあった。

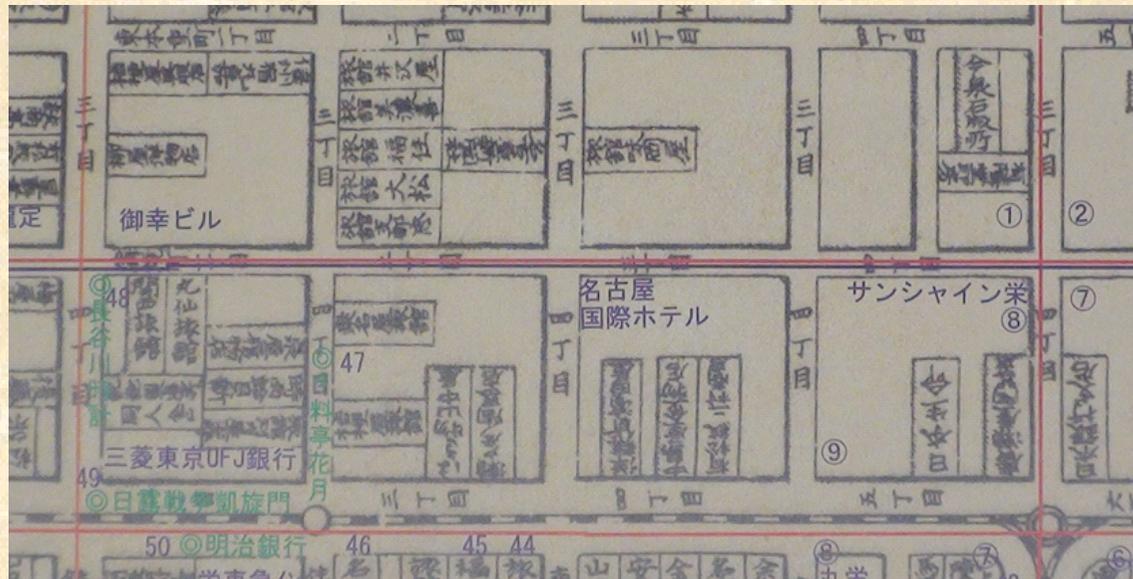
大津町と朝日町と南大津町



伝馬町を境にして、北が大津町(おおつまち)、南が朝日町(あさひちょう)だった。広小路の南は「南大津町」(みなみおおつまち)だった。

豊田佐吉は明治27年、名古屋市東区朝日町1丁目12(当時の住所)で1戸を借りた。伊藤久八夫妻が2階に住んで、佐吉はもっぱら動力織機の発明に精進した。なお、この場所は現在の錦3丁目6(興和本社)の近辺である。

昔から歓楽街だった蒲焼町

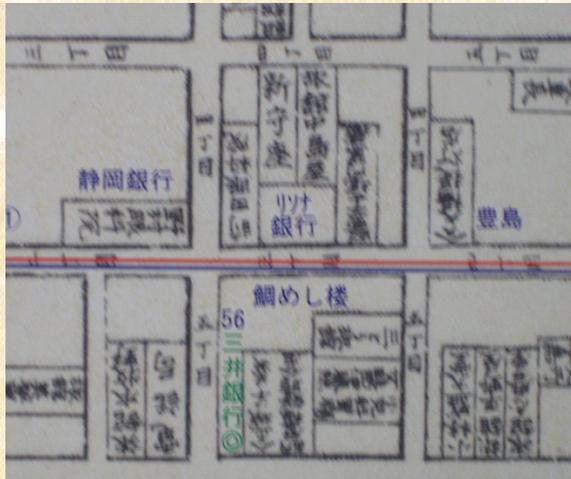


現在の錦通。蒲焼町(かばやきちょう)

一説には、築城手伝いの人夫を相手の茶店を並べ、蒲焼を売っていたからという。

本重町の「新守座」で青松葉事件上演

青松葉事件は、幕末の尾張藩で起きた事件で、後にえん罪だとされた。左は、本重町(もとしげちょう)にあった「新守座」で行われた劇。



龍馬暗殺の2カ月後、名古屋で“青松葉事件”と呼ばれる血生臭い事件が起こった。京都にいた徳川慶勝のもとに、はるばる尾張から一人の侍が駆け込んできた。使者が報せてきたのは、尾張藩内のクーデター計画であった。慶勝は兵を率いて名古屋城に向かった。

3人の藩士が呼ばれた。御年寄列渡辺新左衛門、城代格大番頭榊原勘解由、そして大番頭格石川内蔵允である。ただちに斬首された。

渡辺新左衛門の家は、主人の処刑に驚く暇も与えられなかった。ただちに屋敷を明け渡して出て行くことを迫られた。妻子らは、他家へお預けとなった。(御年寄列渡辺新左衛門の家は片端筋堅杉ノ町南東角。現在の住所は東区泉1丁目4で、スズケン本社の道を隔てて南側)

榊原勘解由の屋敷では、主人の遺骸を検分するため、90歳の父蓬庵が付き添いの女に助けられて玄関まで出た。式台の上まで遺骸を上げさせ、対面して、無念の形相をした息子の首をみた父蓬庵は、翌朝、切腹して果てた。(城代格大番頭榊原勘解由の家は三之丸の内の桜馬場筋内片端筋西北角。現在の住所は中区三の丸2丁目4で、県庁西庁舎の駐車場)

大番頭格石川内蔵允の家は三之丸の内の御霊屋筋中小路西北角。現在の住所は中区三の丸1丁目5で、中日新聞社北館である。

交通の要衝 伝馬町と宮町と神楽町



伝馬町(てんまちょう)は、本町を境にして、東側が「宮町」(みやまち)になる。そして大津通を境にして「神楽町」(かぐらちょう)になる。

名古屋第1の交通の要地、伝馬町には問屋場が置かれていた。常備の人足百人、伝馬百匹で美濃路、飯田街道、上街道、下街道をゆく旅人の便をはかっていた。

問屋場には、槍や刺又(さすまた)、突棒が備えられ、他国からの不審者に目を光らせていた。

寛文5年(1665年)からは、飛脚問屋が置かれ、江戸と名古屋との書状や荷物の取扱いを始めた。江戸まで、七日間で届いた。

本町通と伝馬町筋との交差点には、高札が建っていて、札の辻と呼ばれた。

名古屋第一の交通の要路であり、繁盛地であった伝馬町には、多くの名門、旧家が軒をかまえていた。

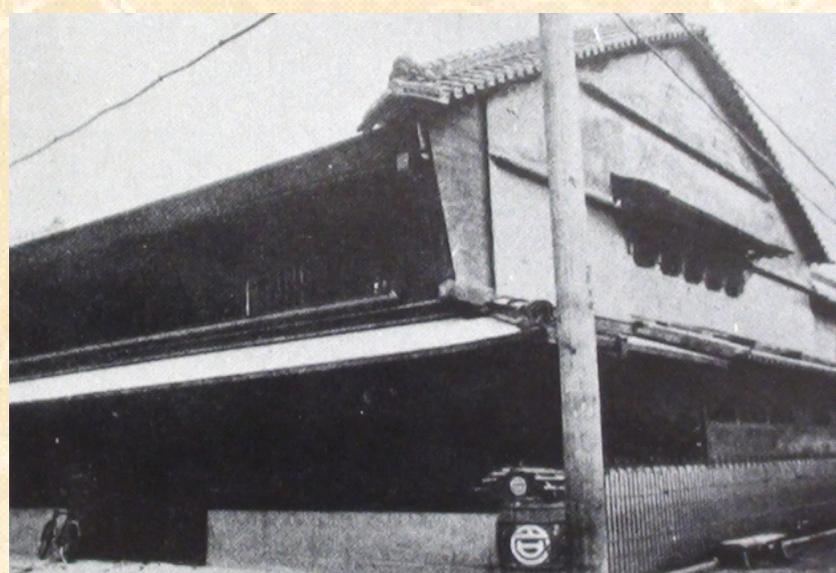
明治時代になると、銀行が相次いで店を構え、ウォールストリート街になった。

繊維商人が旧名古屋銀行を設立

滝兵右衛門、瀧定など、繊維商人が中心になって、旧名古屋銀行を設立した。

本店は、伝馬町6丁目(現中区錦2丁目3番地 八木兵本社)に置かれた。

発起人は、次のような顔ぶれだった。4代目滝兵右衛門(尾張徳川家御用達商人、尾張十人衆絹屋兵右衛門 現タキヒヨー)、瀧定助(瀧定合名会社社長)、小出庄兵衛(尾張徳川家御用達商人、尾張十人衆、現丸栄につながる)、森本善七(尾張徳川家御用達商人、尾張十人衆)



旧名銀がライバルに頭を下げ危機脱出

明治40年の株式大暴落は、名古屋銀行にも飛び火した。各地の銀行が取り付け騒ぎに遭って休業に追い込まれた。

その波はとうとう名古屋銀行にも来た。預金を払い出す行列ができた。名古屋銀行の首脳陣は青くなって、日銀名古屋支店に救援を求めた。だが、日銀の答えは過酷だった。愛知銀行や明治銀行などの保証を得ろというのだ。それがなくては融資できない、の一点張りだった。

愛知銀行とか、明治銀行とか、宿敵同然のライバルである。そこに頭を下げ、助けを求めるのである。

名古屋銀行の首脳陣は、主に滝一門だった。滝一門は私財を担保に供した上で、ライバル銀行の膝を屈して協力要請を行った。こうして名古屋銀行は危機を脱することができた。



外様派の牙城・明治銀行



明治銀行は、当初奥田正香(おくだまさか)が頭取に就任した。取締役には、鈴木摠兵衛、松本誠直、近藤友右衛門が選ばれた。

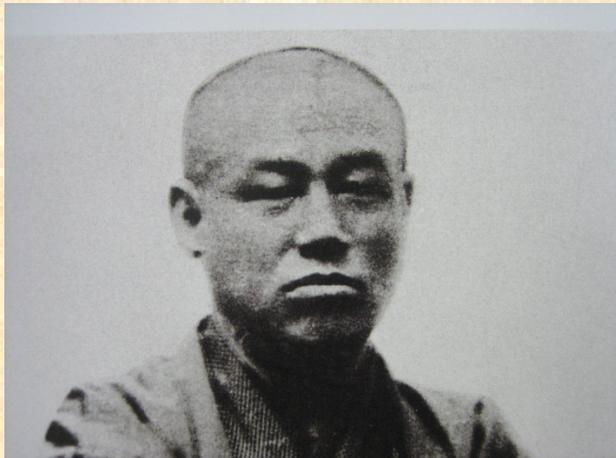
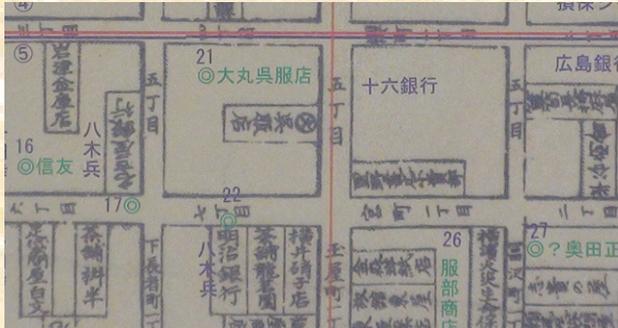
また、明治31年には、奥田正香からの強い要請を受けて、神野金之助が頭取になった。

この役員陣は、尾張藩御用達商人が少なく、近在出身の繊維商人や、外来派と呼ばれる新興勢力が中心で、奥田派に属する人たちだった。

明治銀行の本店は、伝馬町7丁目(現住所中区錦2丁目5番地 八木兵錦2号館)にあった。

明治銀行の本店は最初伝馬町にあった。そして、大正12年には広小路に移転した。場所は、広小路七間町の交差点の西南角、つまり現在東急インのあるところだ。建物は、鉄筋コンクリート地上二階、地下一階建てで、豪華な造りだった。だが、昭和7年に破綻した。

服部兼三郎が興和の前身を創業



服部兼三郎(かねさぶろう)は明治27年、服部兼三郎商店を創業した。創業の地は、八百屋町だった。明治34年には、宮町に移転した。宮町時代に勤めていたのが石田退三である。戦後にトヨタ自動車を再建した、あの石田退三である。石田は次のようなエピソードを残している。

「ある日、皆が忙しく立ち働いている店先へ、古ぼけた小さな袋を手首にかけ、もそっとした恰好のおっさんが一人はいつてきた。物もいわず、だれにもあいさつせず、黙ってわたくしらのすわっている前の椅子に腰をおろした。—中略—

店の出入りや街から流れ込んでくる喧噪を知らぬ気に、椅子によりかかったまま、敷島(煙草)をふかして、何事かをじっと考え続けている。年齢のほどは五十歳前後で、職業のほどもむろんつかみどころがない。なんにしても一種異様な人物である。

そこへ、外から帰ってきたのか、奥から出てきたのか、しばらくたって服部社長が、ヤアと一声かけて現れた。その人はちょっとしたお辞儀も返さない。

『いよう、今日もまたお金ですかい』

このようなやりとりがあって、その日は25万円借りていったという。退三はその大金に度肝を抜かれたという。これが退三と佐吉翁との出会いだった。

兼三郎はその後事業に失敗して自殺する。その再建に取り組んだのが支配人だった三輪常次郎で、それが興和になる。

通称魚之棚 車町と小田原町と魚町



通称:魚之棚(うおんたな)。

車町(くるまんちょう)は、桑名町通を境にして「小田原町」(おだわらちょう)になる。本町を境にして、「魚町」(うおまち)になる。

河内屋林文左衛門が料亭河文を開業したのは、元禄年間のことだ。以後、御納屋、近直、大又と続き、この町に料亭が開業し魚の棚四軒と呼ばれた。

料理屋に芸者は付きもの。文政年間から芸者が料亭で客の取りもちを始めるようになり、しだいに、その数はふえていった。明治6年には、長者町に盛栄連が誕生した。

河文を拠点に集まった御用達商人

明治30年頃、名古屋に1つの財界人サロンができた。「九日会」という名前だった。毎月9日に参集して親睦を図り、官僚の送別会も行うという平和的なものだった。だが、財界の有力者がズラリと並んでいたところから、自ずから強い影響力を持つようになった。

加入していたのは、旧徳川家に恩顧のある御用達商人と、近在出身の繊維商人だった。伊藤次郎左衛門、岡谷惣助という2人を中心にして、そのほかに滝兵右衛門(タキヒヨー)、瀧定助(瀧定)、鈴木惣兵衛(後の材惣木材)、伊藤忠左衛門(由太郎。別名川伊藤家といい、四間道に残っている)、小出庄兵衛(後の丸栄につながる)、森本善七、近藤友右衛門(信友)、神野金之助(名古屋鉄道につながる)など20人近く入っていたようだ。

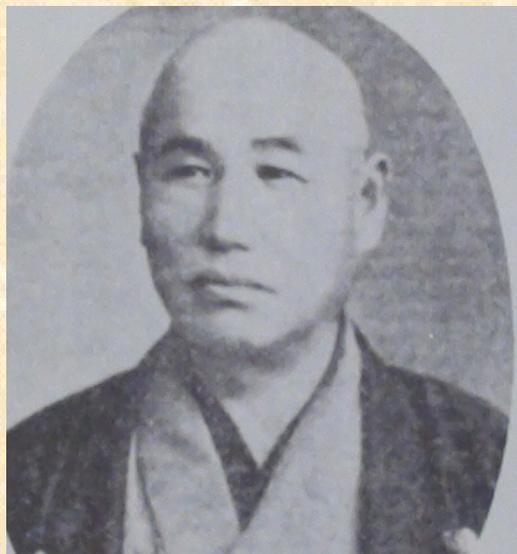
例会は、主に河文が会場になったが、御納屋(おなや。現丸の内3丁目16番地。星野書店本部)も使われた。御納屋は徳川家の賄い方を勤めたこともある名門旅館だった。

この九日会は、単なる親睦会という主旨ではあったが、財界の新興勢力に対抗するという目的を、暗に有していた。特に“緊張”が強かったのは、奥田正香の率いる奥田派との関係だった。

奥田正香が愛した料亭魚半（百春楼）

奥田正香（おくだまさか）は、宮町で奥田商店を開き味噌醤油の販売を始めて成功した。

正香は、公共のためになる事業を次々に興した。明治26年に名古屋商業会議所の会頭になり、大正2年に辞任するまでリーダーシップを発揮した。



関連した主要な企業は、次の通りだ。尾張紡績、名古屋株式取引所、明治銀行。日本車輛製造。名古屋瓦斯、名古屋電力

名古屋財界は一般に土着派、近在派、外様派の3グループに分類されているが、外様派グループの中核的存在が正香であった。

県知事深野一三、名古屋市長加藤重三郎とはいわゆる三角同盟といわれる緊密な関係にあった。

女将おたいが経営していた料亭魚半（ぎよはん百春楼）がお気に入り、清元長唄はもちろん義太夫まで語った。

佐吉 小田原町の河正旅館で解任

明治43年4月上旬、豊田式織機会社の緊急重役会議が開かれた。場所は河正旅館(小田原町)だった。佐吉翁が出掛けてみると、妙な雰囲気だった。社長の谷口は突然口を開いた。

「会社の業績が上がらないのは、発明や試験のため、社員の気がそちらへばかり奪われている結果だと思う。ついては豊田君、気の毒だが、君は辞職してもらいたい」

明治43年の6月、佐吉翁は西川秋次(あきじ)を同伴して、横浜から米国に向けて出帆した。

左の写真は西川秋次



佐吉翁が米国視察に連れていった秋次は、創生期の豊田の事業に大きな功績を残した。秋次は、愛知県二川で生まれた。佐吉翁より15歳若く、喜一郎より13歳年上だった。蔵前工業(現在の東京工業大学)紡織科卒業。

大正7年には佐吉翁に随行して上海に渡った。以後、上海における豊田の紡織事業の先頭に立った。そこで得た資金を本国に送り、喜一郎の自動車開発の資金を提供し続けた。その資金なくて自動車開発はありえないほどだった。

昭和5年に佐吉翁が逝去した後も上海にとどまり、国民党政府(蒋介石)に協力して、事業を継続し、発展させた。

和泉町と茶屋町と京町と中市場町と石町

和泉町(いずみちょう)は、桑名町通を境にして茶屋町(ちややまち)となる。本町を境にして、京町(きょうまち)、大津通を境にして中市場町(なかいちばまち)、武平町通を境にして石町(こくちょう)になる。



明治 37 年の茶屋町本店の売場 まだ昔ながらの座売式であります。

左は明治37年のいとう呉服店

松坂屋のルーツ 伊藤次郎左衛門祐昌



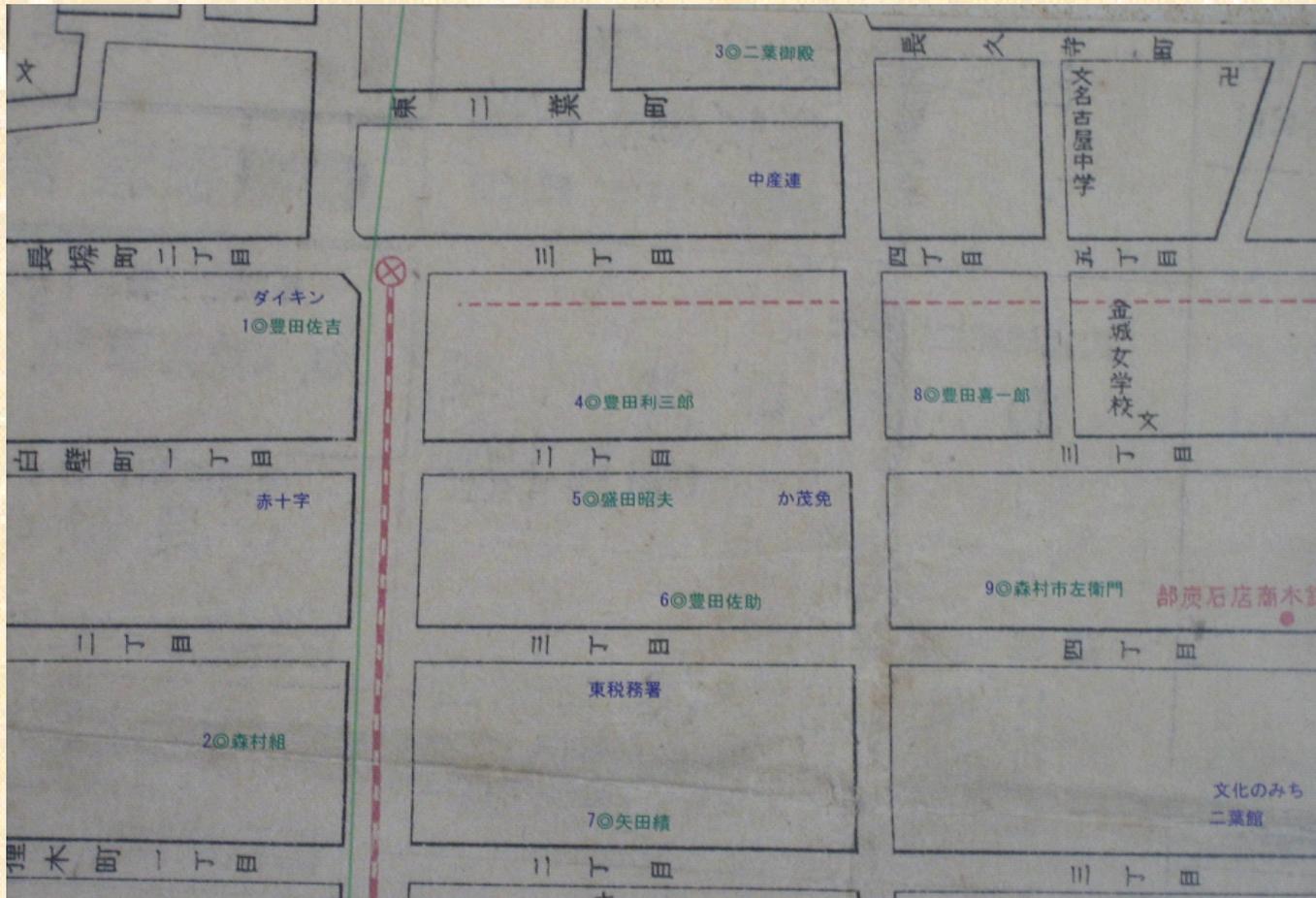
伊藤次郎左衛門家は、松坂屋のルーツである「いとう呉服店」の宗家である。その14代として幕末から明治大正にかけて活躍したのが伊藤祐昌(すけまさ)だ。

伊藤次郎左衛門家は、慶長17年の清洲越以来の商人で、茶屋町で、呉服太物商を営んでいた。

祐昌の功績の中で特に大きかったのは、名古屋城の金鯨の復旧だった。金鯨は新政府になって以来見せ物として回された。祐昌は、財界人と話し合って天守閣に戻す運動を始め、復旧させた。

祐昌は、名古屋商法会議所の初代会頭になり、明治14年3月から明治18年2月まで、その座にあった。

栄生工場の成功後にできた 白壁の豊田一族の邸宅



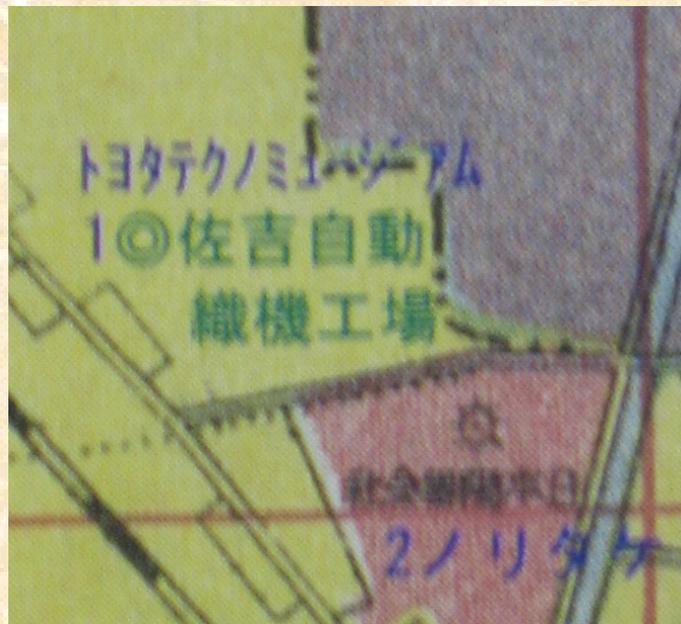
豊田佐吉邸(本宅
といたた)

豊田利三郎邸(佐
吉の娘愛子の夫)
(別宅)

豊田喜一郎邸(新
宅)

豊田佐助邸(佐吉
の弟)

佐吉 栄生で工場建設 再起目指す



豊田佐吉は、明治44年に帰国し、工場建設のための資金集めに奔走した。応援してくれたのは、服部兼三郎、藤野亀之助(三井物産重役)、児玉一造(三井物産名古屋支店長)だった。

明治44年10月、名古屋市栄生で3千坪の工場敷地を借り入れて、翌年工場を新築した。自動織布工場(豊田紡織の前身・現産業技術記念館)がこれである。

豊田紡織株式会社は大正7年に創立された。

その後、上海でも豊田紡績廠が創立された。西川秋次(あきじ)が現地責任者だった。

ちなみに、この豊田紡織から分離独立して、豊田自動織機という会社が誕生したのは大正15年である。

栄生工場を頻繁に見に来た喜一郎

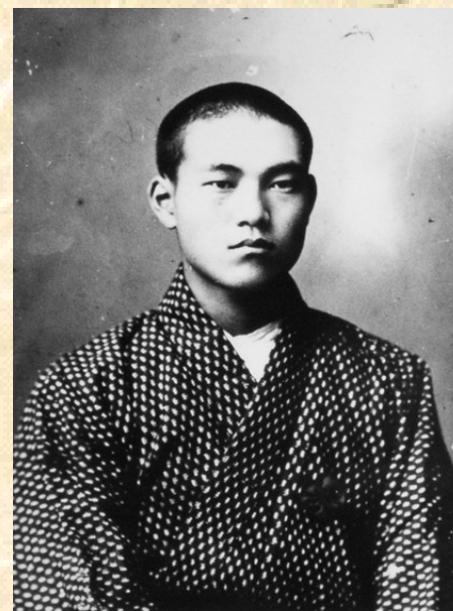
佐吉が栄生で工場建設をして再起を図ろうとしていた頃、喜一郎は明倫中学の生徒だった。城山三郎は「創意に生きる—中京財界史」の中で次のように書いている。

「名古屋の町を西に出はずれた愛知郡中村大字栄の三千坪ばかりの土地にちょっとした工場の建設が進められていた。その工事現場へ、ほとんど日曜ごとにやってくる一人の中学生があった。秀でた眉、しまった口もとからは負けぬ気の性格がひらめいていた」

「彼は明倫中学校の四年生。上級学校への進学が目の前にせまっていた。しかし進学が許されるかどうか、まだ分かっていなかった」

「彼の父親が一年九カ月もかかって、資金を集め歩き、その苦心の結晶が、工場の建設となって現れたとき、誰よりもよろこんだのは少年であった。(久しい父の不振！しかし、この工場さえうまく行ったなら)」

ここで書かれた通り、喜一郎はオカネに困る父の姿を目の辺りにしてきた。佐吉翁は明治45年には藍綬褒章の栄に浴するのだが、この父子にとっては、それよりも目先のオカネの方が問題だったかもしれない。



明治名古屋は4つの区だった

名古屋市は明治41年の4月から、4区制を実施した。

当時の名古屋市域は狭かった。“お城下”と言われた碁盤割地域と熱田神宮を結んだ地域が市域だった。だから、周辺部は名古屋市に属していなかった。例えば守山区、名東区、天白区、緑区、中川区などの多くは市外だった。当時は、人口が37万人で、世帯数が8万軒だった。

◎「中区」は、広小路から南側になっている。現代の名古屋市民にわかるように説明すると「現中区の市域から、広小路以南のみを取り出して、そこを『中区』とする」ようなものだ。その区役所は、大須の万松寺にあった。

◎「西区」は、広小路以北で、かつ、本町通り以西の地域だ。区役所は「外堀町2丁目」(現中区丸の内1丁目3番地 景雲橋を東に向かったエスラインギフの近辺)にあった。

◎「東区」は、広小路以北、かつ、本町通り以東の地域だ。区役所は、代官町にあった。現在日本陶磁器センターのある近辺。

◎「南区」は、現在の熱田区のことである。

どこ？ 明治名古屋のクイズ

松坂屋のルーツの「いとう呉服店」は「西区茶屋町」(明治時代)にあった。さて、そこはどこか？

A(現在の天津通沿いの松坂屋本店) B(名古屋駅前の旧松坂屋名古屋駅前店) C(現在アイリス愛知がある所)

- 正解はC。いとう呉服店は清洲越以来、本町通沿いの茶屋町で店を構えていた。その現住所は「中区丸の内2丁目5番地」であるが、明治のこの頃は「西区茶屋町3丁目」であった。

栄の「サンシャイン栄」は、錦通沿いの「中区錦3丁目24番地」(現在)にある。さて、そこは明治時代の町名は何だったか？

A(蒲焼町4丁目) B(玉屋町4丁目) C(鉄砲町)

- 正解はA。現在の錦通は「蒲焼町」(かばやきちょう)といった。ちなみに「玉屋町4丁目」というのは旧東海銀行本店のある場所。「鉄砲町」というのは現在岡谷鋼機のある場所。

豊田佐吉の創業の地は「朝日町1丁目」(明治時代)であった。さて、そこはどこか？

A(現在西区にあるトヨタの産業技術記念館の所) B(現在ミッドランドスクエアになっている名古屋駅前の所) C(現在の錦3丁目6番地 興和本社の近辺)

- 正解はC。佐吉は明治27年に興和本社の近辺「朝日町1丁目」(現在の錦3丁目6番地)で創業した。28年には「寶町」(テレビ塔の南側近辺)に移った。30年には武平町(現東区泉1丁目 トヨタ名古屋ビルの東側)に移った。佐吉翁はお酒が好きで、頻繁に飲んでいたが、その場所は「蒲焼町」だった。つまり佐吉翁は、現代風に表現すれば「錦3のオトコ」、昔風に表現すれば「蒲焼町のオトコ」なのである。

このレジュメで承諾を得た先

トヨタ自動車様

伊藤次郎左衛門家様

岡谷鋼機様

タキヒヨー様

材惣木材様